

# 『本朝二十不孝』研究史ノート（二）

## ——「戯作」説の展開——

有 勵 裕

本稿は、『国語国文学報』第六二集（平成一六年三月）の拙稿「本朝二十不孝」研究史ノート（一）に続くものである。

前稿においては、昭和三十年代までの研究史を、「本朝二十不孝」という作品における教訓的言辞とリアリズムとの矛盾・分裂という側面がどのように論じられたかを中心にしてまとめた。本稿は、昭和四十年代以降の、「戯作」としての『本朝二十不孝』という論点に絞って研究史を整理するものである。

### 一、「戯作」説の登場

谷脇理史氏の「『本朝二十不孝』論序説」は、『国文学研究

（早大）』三六号（昭和四二年十月）に掲載された（注1）。

谷脇氏はまず、従来のこの作品に対する解釈を二つの論に代表させて整理する。一つは将軍綱吉に対する反感から親不孝話を集めたとする野間光辰氏の説（注2）、今一つは教訓的説話として孝道奨励に資することを意図したとする横山重・小野晋氏

の説（注3）である。

谷脇氏は前者について、教訓の仮面に隠した反逆の姿勢を読み取ることは実証不可能であるとして退けている。また、後者については、「教訓的な言辞を弄しているという事実と、西鶴がそれを教訓の意識で行っているということ」はイコールではないとして、その論述の性急さを非難する。その上で氏は、「教訓的言辞を弄し談理の姿勢を表面に出すことが、読者に笑いと慰みとを提供するための手段となる場合さえありうる」ということを前提に、常識的な孝道観をいかに面白おかしく書こうとしたかという西鶴の「戯作意識」を中心に据えた論を展開する。

ここで注目すべきは、従来の研究において必ず取り上げられてきた、教訓とリアルな描写との分裂・矛盾が全く問題にされていないことである。体制的とでも言い得るような教訓的言辞や型どおりの因果応報譚的展開が認められる一方で、悪の側面が執拗に描写され孝不孝の問題から逸脱した社会的側面が浮き

彌りにされる。この『本朝二十不孝』という作品のまとまりの悪さこそが、それまでの研究者を悩ませてきた問題であった。

それゆえに、論述にどこか歯切れの悪さが伴つたり、作品としての不完全性に言及せざるにはいられなかつたりした。

谷脇氏の立論は、それらの問題を全て切り捨てたところでなされている。なぜそのようなことが可能なのか。それは、まさに「戯作」という言葉の持つ融通無碍ともいいうべき力によつて

いる。

氏はまず序文の、「雪中の筈八百屋にあり」といつた現実的・合理的孝道觀、不孝者が「天の咎」を受けるという撰理等が、『孝經』『鑑草』『翁問答』などに記された当時の常識的な倫理觀から外れるものではないことを指摘する。「此常の人稀にして悪人多し」という一節にしても、「單なる現象の指摘にすぎない」として、深刻な現実凝視の姿勢とは切り離して考へている。それよりも氏が注目したのは、諸国咄形式の採用や各巻一章ずつの女性の不孝者の配置、目録における本文内容暗示のカットなどの編集的工夫・努力であつた。そこには、書肆や読者の期待に答えようとする、西鶴の氣負いが感じられるとする。

この時点での谷脇氏の言及はほとんどが序文に対しのものである。そこには、悪人の生じる必然性や反逆への共感などは記されていないといいう事実が確認され、そこから次のような谷脇氏なりの読者像・作者像の提示へと展開していく。

読者は「好色一代男」の作者西鶴に、しかつめらしい、しかも常識的な教訓を期待している訳ではない。仮に教訓が行わられるにしても、それが面白おかしく行なわれることを期待しているであろう。(中略) 西鶴はすでに指摘した明確な読者意識を持つてゐるし、読者が彼に何を求めているかも知つてゐるであろう。それは云うまでもなく常識的な教訓ではない。従つて西鶴は、それを語るにしても面白おかしく語り、読者を楽しませなければならぬ。彼の作品は「慰み草」(「二代男」跋)なのである。

慰み草の提供者、すなわち「戯作者」西鶴の提示がここでなされているのである。したがつて読者は、序文を読んで「好色一代男」の作者の「もつともらしい言い分に笑えば良い」のであり、「孝にすゝむる一助ならなかし」という言葉には西鶴の「戯作意識」が認められるというのである。

面白おかしい慰み草として作品を提供したまでである、といふ発想は、これまで研究者を悩ませてきた問題を全て無化するものと言つてよい。教訓と描写の乖離・分裂などを作者の苦惱や苦心の跡と考え、失敗作があるいは擬装かなどと悩む必要はもはやない。ただ面白おかしく書こうとした結果にすぎないので、ということになる。「戯作」という融通無碍なタームはすべて解決してくれる。それは、どんなに異常な悪が描かれてゐるにしろ、作者の認識は常識の枠内にあるという、趣向と思は

て いるからである。

この、『本朝二十不孝』イコール「戯作」「慰み草」説は、以後の『本朝二十不孝』研究に大きな影響を与えることとなる。ただしそれは、谷脇氏自身の「戯作」觀から乖離しつつ展開したものでもあつた。

## 二、「戯作」と典拠・付合

井上敏幸氏は『本朝二十不孝』の方法——『二十四孝』説話と手懸に——を『語文研究』(九大国語国文学会)第三一・三二号(昭和四六年十月)に発表する。この論文は、谷脇氏の「序説」を継承する形で書かれており、直接には序文についてしか論じていなかつた谷脇氏の「戯作」説を、各章に敷衍させて例証を試みようとするものである。

ここで氏は、次のような三つのグループに分けて説明している。

- ①『二十四孝』説話の逆設定が、咄の構成を支えており、それ自体が一篇の方法となりえているもの(卷一の一「今の都も世は借物」、卷二の四「親子五人仍書置如件」、卷五の三「無用之力自慢」等)
- ②『二十四孝』説話を俳諧的連想によって構成したもの、また、『二十四孝』の挿絵を直接のヒントとし、その逆設定が俳諧

的連想によつて纏められたもの(卷一の一「我と身をこがす釜が渕」、卷三の三「心をのまる、蛇の形」、四の四「本に其人の面影」等)

③『二十四孝』の説話の逆・順の設定が、演劇的着想によつて、または演劇的手法によつて生かされたもの(卷四の一「善悪の二つ車」、五の一「胸こそ踊れ此盆前」等)

ここで問題となつてくるのは、「戯作」とは何かという根本的な問題である。ある話が特定の典拠を持ち、その設定を順用あるいは逆用しているということ、あるいは俳諧的な付合の意識が作用しているということに限つて、井上氏は「戯作」としての認定を行つてゐる。

たとえば、卷一の一「今の都も世は借物」は、全体の四分の一定程度に当たる、息子が親仁の命を短く祈り毒殺しようとする最後の場面こそがこの一章の眼目であり、それ以前の四分の三はそのための伏線にすぎないとする。その理由は、そこが『二十四孝』の「漢文帝」や「庾黔婁」の逆設定だということにある。また、卷二の一「我と身をこがす釜が渕」は、郭巨説話の釜を石川五右衛門の釜茹でに置き換え、「盜人→近江」という俳諧的連想で話の舞台を決定したものだとする。

となると、『本朝二十不孝』を「戯作」として読むという行為は、先行説話の逆転や談林俳諧的な手法を見出して行くといふことになるのだが、これは谷脇氏の論をかなり特異な方向に限定して展開したもののように思われる。

また、氏は「戯作」的な意識に注目しつつも、教訓・談理の姿勢も見逃せないとする。そして、結局西鶴は、自らが序に掲げた「孝の一助」とするというテーゼと『二十四孝』の逆設定として不孝を語るという方法との矛盾の中に揺れ動いていた、と結ぶ。つまり、「戯作」意識という融通無碍な観点を用いても、なおそれに収まりきらない矛盾・分裂を見出しており、谷脇氏のようには割り切れていないことができる。

岡本勝氏の「『本朝二十不孝』の一側面—卷二ノ一、二ノ二をめぐって」<sup>(注4)</sup>もまた谷脇氏の「戯作」説を継承する形で書かれている。

氏によれば、「本朝二十不孝」は「巷間の説話をいかに面白い話に仕立てるか」という点に意を用いて」書かれており、その「面白い話にするための工夫」を、すなわち「隠された苦心の一つ一つを解きほぐすような読み方」を読者に求めようとする、「挑戦的な姿勢が感じられる」作品なのだという。

したがって、その「挑戦的な姿勢」に応じるように読むためには、西鶴が典拠として用いているものを熟知していなければならぬ。たとえば卷二の一「我と身をこがす釜が淵」については、釜茹でにされながら子どもを下に敷くというセンセーショナルな結末が、他の五右衛門説話にはないすさまじさを備えていることを把握した上で、さらにその行為を「己その弁あらば、かくは成まじ」と突き放して結んでいるところに「近世的批判精神」を見出す読み方が求められている。また、二の二

「旅行の暮の僧にて候」では、謡曲的構成がオーバーラップされていていることを意識し、語られていない殺された僧の靈の存在を十分に読み取ることが必要となる。

井上氏の論との差異は、『二十四孝』のみに限定せず先行説話・巷説等との関連を論じた点にあるが、ともに谷脇氏の「戯作」説を典拠論とかわらせて発展させたものとどちらえることができよう。

### 三、『本朝孝子伝』からの「転写書」

谷脇氏が提示した、「読者に笑いと慰みを提供する」ものとしての「戯作」という発想は、この後もさらに限定された方向へと展開していく。中でも、「本朝孝子伝」を典拠として、それとの関連性を俳諧の付合の方法で説明していくこうとする佐竹昭広氏の論は、突出した形でその精緻さの度合いを高めたものといつてよい。

佐竹昭広氏の「『本朝二十不孝』私見」が発表されたのは『文学』の昭和五七年四月号であった。ここで佐竹氏は、「本朝二十不孝」全二十篇は、すべて「二十四孝」説話と結び付いているとし、さらに藤井懶斎の『本朝孝子伝』(貞享元年刊)今世部の二十人とも密接な関係にあるということを主張する。この両者と『本朝二十不孝』の各章は一見無関係であるかのような外見を呈してはいるが、俳諧の付合の手法を用いて説明すれ

ばその謎解きは容易であるとし、次のように結論づけている。

たしかに西鶴は、『本朝孝子伝』の好評に便乗して『本朝二十不孝』を作ろうと志した。浮世草子作者としては、『本朝孝子伝』の今世の二十人を悉く親不孝者にすり替え、すり替えに際しては、これも當時流行の「二十四孝」説話と併説的手段を駆使して存分に活用した。

その意味で『本朝二十不孝』は『本朝孝子伝』今世部を経とし、「二十四孝」を緯として作られた転合書である。佐竹氏は「戯作」という用語を用い、「転合書」と言つてはいるのだが、谷脇氏・井上氏・佐竹氏という順に論を並置してみると、そこに「戯作」説の一展開を跡付けることができる。

これ以後佐竹氏は同じ観點から『本朝二十不孝』の各章に対して次々と論究を重ねていく。『本朝二十不孝』私見<sup>(注5)</sup>、「大坂に後世願ひ屋」「本朝二十不孝」私見<sup>(注6)</sup>、「ふるき都を立てて雨」は次のような一章である。

奈良の刀屋徳内の不孝息子徳三郎は勘当され、門付をしながら江戸に下るが親切な請人屋の勧めで太根売りとなる。ある冬の雨の日、困窮した浪人一家の前を通りかかり、憐れに思つて大根を与える。米・味噌を調えて再訪したところ、年老いた夫婦の臨終を前に養子の虎之助が自害しようとするところであった。徳三郎はそれを止め野辺送りを手伝うが、一家の難儀の様を聞くにつけ、奈良に残してきた親のことが身にこたえて悲しく感じられた。後に信濃の歴々の武士が訪れ、虎之助の実父と名乗つて国元へ連れて帰り、徳三郎には礼を言って金子三百両を与えた。徳三郎はそれを元手に商いを始めて分限となり、奈良から二人の親を迎えて豊かに暮らした。

佐竹氏はこの一話を、「二十四孝」説話の「姜詩」を活用し、また、『本朝孝子伝』今世部の十「横井村孝農」を反転させて用いていたものだとする。「姜詩」は、母のために七里の道も厭わずに川の水を汲んで運び膾を供するという話で、「大根」と「膾」が俳諧の付合語であることから両者の関連が指摘できること。また、「横井村孝農」は、備前津高郡横井村の太郎左衛門が、貧しき農夫でありながら士大夫のごとく父親を敬愛

「二十不孝」の製作に参加する快樂である。(注10)

『本朝二十不孝』を「転合書」として楽しむ—そのような佐竹氏の「戯作」的な解釈の一例として、最終章である卷五の四「ふるき都を立てて雨」についてのものを示したい。「ふるき都を立てて雨」は次のような一章である。

し、国主に賞せられたというもので、この太郎左衛門こそ、「扱も頼もし心底、武家にもめづらし」と賞賛された徳三郎の人柄そのものだという。

さらに佐竹氏は、この最終章の季節の設定が刊記の「貞享三年丙寅 霜月 吉辰」と一致していることから、『本朝孝子伝』の漢文体を改めた『仮名本朝孝子伝』との競合を西鶴は意图して貞享三年一月の刊行を目指していた、と推定している。

この場合、「姜詩」と結びつけられたことで、「ふるき都を立てて雨」という一章に、どのような読みが新たに見出されることになるのか、ということについては何もふれられていない。両者が大根と贈の付合によつて結びついた時点で佐竹氏の考究は終了する。「横井村孝農」との関連についても、同様にその意味が問い合わせることはない。

四、佐竹説からの展開

佐竹氏の説を全面的に肯定したうえでより精緻に推進したのが、二村文人氏の「『本朝二十不孝』と西鶴の創作意識—付合語による構想—」(注1)「『本朝二十不孝』と俳諧的連想」(注12)などの論稿である。

氏は、「二十四孝」説話と『本朝孝子伝』を両極に据えて、その中間に『本朝二十不孝』を置き、その三者の関連性を付合によつて説明している。また一話の展開の細部に至るまで、付合語の連想によつて説明している。その際、もっぱら根拠として用いられているのは『俳諧類船集』の記述である。

たとえば、卷一の三「人は知れぬ国の土佐」は、『本朝孝子伝』今世部第十七「鍛匠孫次郎」の逆設定であり、「二十四孝」の「楊香」の逆設定でもあるという。「鍛匠孫次郎」の鍛治という職業は、「類船集」の認める付合の関係によつて、鍛治→船→釣と連鎖して「人は知れぬ国の土佐」の釣針作りの鍛治職人の一子藤助へとつながる。船はまた遊女と結びつき、遊女のものも見出し難いように思われる。

しかしながら、佐竹氏によれば、そのように一見何も関連し

ていないような話が結びつけられていること自体「戯作」的なのであり、その「隠された」関連を見出して「謎とき」を楽しむことこそが『本朝二十不孝』の読み方だということになるのである。

の「呉猛」は、親のために自分の血を蚊に吸わせる話であるが、その「膏血」は孫次郎が漂着する纈縫城の「纈縫」と同音で通い合い、纈縫からはくし染めが連想され、そこから伊勢という「人は知れぬ国の土佐」の舞台設定が導き出されたとする。

二村氏もまた、「戯作」という用語を用いることはない。しかししながら、その論究のあり方が佐竹氏の説をふまえていることは氏自身が表明しており、やはりここでも読むという行為は、典拠の反対設定を見出しつつ作者の作為の跡を探る作業として認識されている。

ところで、佐竹氏の一連の論稿は、先にあげた『絵入本朝二十不孝』とともに、『新日本古典文学大系76 好色一代男 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝』(岩波書店、一九九一年)の注釈へと結実していく。その佐竹氏の注釈を「座右に備え」て読むことを前提とした論に、中村幸彦氏の「本朝二十不孝」助作者考」(注13)がある。

中村氏は、佐竹氏が示した『本朝孝子伝』の逆設定という構想を認めたうえで、それとはかわりなく書かれていると思われる「浮世草子風文章」、すなわち、当世風俗や町人社会の紹介文が随所に挿入されていることを指摘する。そして、この作品には助作者が存在していたことを前提として、創作過程についての次のような推測を述べる。

まず、新刊の『本朝孝子伝』今世部の二十人を逆設定して浮世草子を作成することが、西鶴を中心とした談林の俳人達の間

で決定され、さらにそれに周知の「二十四孝」説話の趣向をも加えることが決められる。また、それぞれの不孝の原因となる二十の性質も提示され、くじでも引くような方法で素材とすべき人物と性質とが各人に割り振られていく。このようにして助作者たちが書いてきたものに、西鶴が「浮世草子風文章」を付け加えて仕上げたものが、「本朝二十不孝」となったというものである。

ここでは、「本朝二十不孝」に助作者が存在したということを前提として立論がなされており、さらにその前提として、二つの文体が一作品に混在している以上二人の手によつて書かれたに違いないとする認識が存在している。当然これらについては疑問があるわけだが、ここでは言及をさけたい。ここで問題にしたいのは、佐竹氏の「戯作」説の延長上にある発想では、「本朝二十不孝」という作品の全体像を決して説明仕切れないという事實を、中村氏の論が図らずも示してしまつてゐることである。

谷脇氏が提示した時点では、「戯作」は「本朝二十不孝」という作品の教訓性と現実的描写との分裂・矛盾の様相を融通無碍に解消してくれるタームであった。しかし、それが佐竹氏の「転合」、すなわち典拠の逆設定という把握に至ると、「浮世草子風文章」が取り残されてしまい、その包容力の限界を見せてしまう。その新たな分裂の相を成立論と関連させて説明しようとするところに、中村氏の助作者説は成り立つたている。

## 五、「謎とき」の限界

一時は学界に公認されたかに見えた佐竹氏の仮説も、近年ではかなり疑問視されているといえるのではないだろうか。あるいは、『本朝孝子伝』の逆設定という発想からではそれ以上の読みの深まりが期待できないということもあって、言及されることが少なくなっているようと思う。

佐竹氏の論に対する疑問を、早くから表明していたのは篠原進氏であった。氏は「『本朝二十不孝』の空間」(注14)において、『本朝孝子伝』今世部の逆設定として書かれたものであると断定するだけの必然性がないことを指摘している。たとえば、卷一の一「今の都も世は借物」は「大炊頭源好房」の逆設定と佐竹氏は指摘するが、親に薬を飲ませる際に毒見をする孝子譚のパターンが定式化していた以上、『本朝孝子伝』のこの話のみを意識しなければならない必然性はない。さらに、両書の関連を見出すのに無理があるのも少なくなく、中江藤樹(『中江惟命』)と石川五右衛門(卷二の一「我と身をこがす釜が淵」)を「近江」と「盗人」が付合ただということだけで結びつける強引さにも疑問を呈している。

氏の佐竹氏に対する批判は、「西鶴の「仕掛け」をあまりに複雑に読みすぎているような気がする」という記述に集約されているといえよう。

また、塩村耕氏の「『本朝二十不孝』—奇抜な発想—」(注15)はより正面から佐竹説の問題点を指摘している。

『類船集』などの付合辞書を活用して『本朝孝子伝』等との関連性を示す暗示的手法を見出そうとすることについて、氏は次のように述べている。

まず俳諧に特殊な、いわゆる「俳諧的」連想なるものは存在しない。すなわち、付合語に当時一般の連想のネットワークをはみ出すものではなく、俳諧師西鶴が語の連想関係に鋭敏であったことは認められるとても、読者に特殊の連想の読み取りを要求するはずもない。特に  $A \rightarrow [B] \rightarrow C$  のよって  $A \rightarrow C$  となるとの、間に媒介語  $B$  をおいた連想関係の設定は基本的には無理で、これを用いなければほとんど全ての語の間に連想関係が生じかねない。

佐竹氏や二村氏の緻密な解説に初めて接した際には必然的なものに感じられた『本朝孝子伝』と『本朝二十不孝』との関連性も、あらためて両者を読み直してみれば、それを確實に保証するような場合はほとんど見当たらぬといつてよい。そのことは佐竹氏も承知しているからこそ、「肥後の貧農も西鶴の手にかかるれば、たちまち、所・職業をすり替えられて跡形もない」(注16)「：久左衛門の「孝」の内容 자체を「本に其人の面影」に転化させることは、殆ど不可能だと言つていい」(注17)といつたことを繰り返し述べてきたのであった。

となればやはり、『本朝孝子伝』ならずとも、あらゆる説話

が典拠となり得る可能性を有しているということになってしまった。もしあくに、実際に西鶴が『本朝孝子伝』を利用することがあつたとしても、「跡形もない」というほどに変化してしまつた「典拠」には、もはや読者にとっての典拠としての意味は存在しないといつてよいのではないだろうか。そのように考えると、塩村氏の「結局のところ、先行の孝行話の逆説的利用といえる章は存外に少なく、またその利用も部分的な趣向にすぎず、全体の作意にかかるようなものはほとんどない」というのが実態に近いのではないか」という指摘が極めて妥当なものに思えてくる。

## 六、谷脇氏の「戯作」説

ところで、「謎解き」的な典拠さがしを促す性格を「戯作」と考へ、そこに作品の本質を見出すような論の在り方は、そもそも谷脇理史氏の主張するところの「戯作」的な読みとは全く異質のものであつた。『本朝二十不孝』論序説の時点では、各章の「戯作」性についての具体的言及がなかつたこともあつて、「面白おかしく」「慰み草」として語るという発想が思わぬ方向に継承されてしまった感がある。

「本朝二十不孝」論序説 発表八年後に、谷脇氏は益田勝実・松田修編『日本の説話5 近世』(東京美術、昭和五十年)に「咄の咄らしさ—西鶴の語り口をめぐって」を執筆する(注18)。

この論文において氏は、卷一の一「今の大世は借物」を例に、具体的にその「戯作」的な解説を示している。

そこで説明されているものは、隠されている典拠さがし、すなわち「謎解き」の発想とは正反対のものであるといつてよい。むしろ典拠・原拠との関連性を一切捨て去つたうえで、そのまま「語り口のおもしろさ」をいかに楽しむかという読みの姿勢である。

氏は西鶴の語り口の特色を次の三點に整理する。

① 同様の事物の羅列や並列  
② 随所で示される西鶴の感慨や批評

③ それぞれの話題を一応完結させてつかずはなれずの型で次の話題に転ずる完結指向性

「同様の事物の羅列や並列」の面白さは、卷一の一の冒頭部に示された京の町の零細な職業づくしの、まさに「世に身過ぎは様々」を具体化して見せた部分や、「死に一倍」で大金を借り出した篠六から次々と金を巻き上げていく人々の描写に見出しができる。

また、「随所で示される西鶴の感慨や批評」は、卷一の一においては、騙り同然の手口で「京中の悪所銀を借出す男」である「長崎屋伝九郎」に対して述べられた、「さし詰りたる時、人の為にもなる者なり」という記述などがそれにある。ある事象を固定化して見ようとする認識を常に相対化し、読者の認識を拡大していく。これを谷脇氏は「いわゆる戯作的認識が方

法として発動する時の基本形の「一つ」と考えることができるとしている。

最後の「それぞれの話題を一応完結させてつかずはなれずの型で次の話題に転ずる完結指向性」は、卷一の一が単一のストーリーのみではなく、京都の職業づくしや死一倍の解説、篠六にたかる人々の描写など、いくつかの異質な「はなし」の繋ぎ合わせによつて成り立つてゐることを指す。谷脇氏は、これを中村氏のように成立論には結び付けず、口承芸術としての「はなしの手法」と結び付けて説明する。すなわち、これらの語り口の特色は、たとえ連句の修練と結びついて成立したものであつたとしても、同時に、咄の場で聴衆を飽きさせないための効果を持つものとして十分に生かされていると考えられている。ここに、俳諧語の付合を手掛かりに「謎解き」をするというものは全く異質な、「戯作」的発想を見ることができる。

さらに近年に至つて、谷脇氏は「本朝二十不孝」の教訓の意味——作者の姿勢と読者の問題——（注19）において、「本朝孝子伝」を関連させた読み方を明確に否定している。

『本朝孝子伝』が明窓淨机に座して読まれるものとすれば、『二十不孝』は仕事のあい間や寝床の中で、いわば暇つぶしに読まれるはずのもの、現在の研究者のように、三書（『二十不孝』を含めて。引用者注）を読みくらべるような事態は、まずありうるはずもない。さらには、また、『好色一代男』『本朝二十不孝』を読んで喝采する

読者と、『本朝孝子伝』『仮名本朝孝子伝』を真剣に読む読者とは、当時もはや「住み分け」が行われており、「二十不孝」が慰み草として「教訓的な説話集」の形をとつていても、そこに教訓を求めて読む読者はおらず、そのことを自覚する西鶴が、

読者・読書の実態をこのように断定してしまうことには疑問を感じるが、そのことよりもここでは、『本朝孝子伝』と関連させた読みを教訓的な読みと規定していることに注目したい。佐竹氏らの読みは『本朝孝子伝』との関連を重視してはいても決して教訓的なものではなく、典拠さがしという知的な謎解きを楽しむという意味での「戯作」的なものであつたことは既に述べたとおりである。その点で谷脇氏の批判はいささか的を外れていることになろう。しかし、そういった批判の仕方そのものが、谷脇氏の慰み草の「戯作」の概念に「謎解き」的な要素が入り込む余地がないことを物語つてゐるといえる。

## 七、「戯作」説登場の意味

篠原氏や塩村氏が指摘したような問題点が広く認識されるようになつたためか、典拠との関連を付合の方法を駆使して詳細に検討する論文は近年あまり見かけなくなつたようと思われる。しかしながら、それは谷脇氏が本来提示したかったような「戯作」的発想に、その後の「本朝二十不孝」論が收斂していく

つたことを意味しない。多くの研究者の意識の中ではやはり、この作品の中に同居する教訓性と現実性との矛盾・対立の問題は解消されてはいなかつたのである。むしろ、その矛盾・対立にこそ作品の何か本質的なものを見出そうとしていた。言い方を換えるならば、教訓的な読み方や「謎解き」という発想には従えないが、「戯作」＝慰み草という図式で当時の常識的な社会認識の枠内にこの作品を収めてしまうことにも物足りなさを感じている、ということになる。篠原氏の言葉を借りるならば、谷脇氏の論に対しても、「面白さ」の「その先に何もなかつたか」（注20）という疑問を感じていると言つてよい。

当然そこにもう一つの『本朝二十不孝』論の系譜が存在していることになるわけだが、それは続稿で扱うこととし、ここまで述べてきた「戯作」説の持つ意味というものをについて、少し別の角度から言及してみたい。

少なくとも本稿で取り上げた諸論においては、「戯作」という語を否定的な意味合いで用いているものはなかつた。西鶴作品を「戯作」として評価する、ということが許されるようになつたということは、ある意味で画期的のことであつた。

明治以後の文学および文芸評論の展開において、「戯作」は古典文学分野の中には最も冷淡に扱われた分野であった。それどころか、嫌惡の対象とされてきた。それは、「近代文学」と比較して、戯作に欠くものは人生との眞面目なる対決で」あつたからだ。戯作の手法の代表とも言い得る「うがち」は、あ

「暴露」というには迫力に乏しく、風刺としては語り手の主觀があらわでなく、無責任なトピック的な放言による裏面觀風なもの」にすぎず、読者は「作者と共に面白がれば良い」というものであつた……。

このように中村幸彦氏が定義した『戯作論』が角川書店から刊行されたのが、昭和四一年のことである。まさしく「戯作」は否定的概念であつたと言つてよい。ところが、この著書の出現 자체が、「戯作」を「人生との眞面目なる対決」と切り離したもので、戯作の文学性を全面的に否定してしまうような姿勢はもちらん、戦後の民主主義の高揚とともになされたような、特定の作品の「庶民愛」を強調して「本ものの戯作」と評価したりする（注21）ような論究の仕方も、中村氏の『戯作論』の登場によつて過去のものになつたといえよう。

考えてみれば、昭和三十年代までの『本朝二十不孝』研究のみならず西鶴研究は、いかに「人生との眞面目なる対決」として読み得るかという試みであつた。教訓的に読むにしろ抵抗の文学として読むにしろ、西鶴は現実の社会と正面から向かい合う作者として認識されていた。そのことを否定してしまうことは、たちまち「戯作」と同等のものに「堕して」しまいかねないという危惧から、何としても避けねばならなかつた。

それゆえに、谷脇氏が『本朝二十不孝』は「戯作」であると  
いうことを否定的な形でなく主張し、それを継承したさまざま  
な論が続出したという出来事は、西鶴研究のあり方、近世文学  
研究のあり方の大きな変容を意味しているといえるだろう。

もちろんその背景にあるものは、「戯作論」刊行前後の戯作  
研究の進展ということにどまらないだろう。三浦雅士氏は、  
一九六〇年代から一九七〇年代にかけての高度経済成長と大学  
の大衆化が明治以来の文学観の変貌をもたらしたと説いている  
が（注22）、そういう社会状況も、『本朝二十不孝』の研究の  
あり方に、やや屈折した形ながら、かかわっているものと思わ  
れる。

### 《注》

（注1）後に『日本文学研究資料叢書 西鶴』（有精堂・昭和  
四四年）に収められ、『西鶴研究序説』（新典社・昭和五  
六年）に再び収められた。

（注2）野間光辰「西鶴と西鶴以後」『岩波講座 日本文学  
第十近世』昭和三四年

（注3）横山重・小野晋『本朝二十不孝』（岩波文庫・昭和三  
八年）解説

（注4）『国語国文学報』三二号・昭和五二年三月

（注5）『成城文芸』一一七号・昭和六一年二月

（注6）『成城国文学』三号・昭和六二年三月

（注7）『文学』昭和六三年一月

（注8）『成城国文学論集』一九輯・昭和六三年七月

（注9）岩波書店・平成一年

（注10）（注7）と同。

（注11）『国語と国文学』昭和五九年七月号

（注12）『日本文学』昭和六一年八月号

（注13）『江戸時代文学誌』八号・平成三年一二月

（注14）『弘学大語文』十号・昭和五九年

（注15）『解釈と鑑賞』平成五年一月号

（注16）（注5）と同。

（注17）（注8）と同。

（注18）後に『西鶴研究論叢』（新典社・昭和五六六年）に再収。

（注19）『雅俗』平成十年一月

（注20）（注14）と同。

（注21）近藤忠義「戯作について」『文学』昭和三十年十月号。  
後に『日本古典の内と外』（笠間書院・昭和五一年）に

再収。

（注22）三浦雅士『青春の終焉』講談社・平成一三年

（うどう ゆたか）